

青髭 2 4

明宏訊

アンリは、この馬面の青年に救助の手を差し出すことにした。

「どうやら具合が悪いようです……」

やおら立ち上がると侍女に目配する。すぐに彼女たちは彼の意を即解したが、この場の支配者はアデレイドに他ならない。主人に無言で意思を伺う。それを確認したアンリは自らの口を動かすことにした。

「具合が悪いようですから、私の部屋に連れて行きます、母上」

押し問答しても事態がよくなるとは思えなかったので、彼女の許可、不許可の確認をまったくしないままに、不作法だが茫然自失のギュスターブの肩に触れると外に連れ出した。

おそらく、母親は何か気付いているに違いない。作法とか、礼儀とかにわりとうるさい彼女が何も言わないどころか、眉のひとつも歪ませなかった。だが、この無表情はあきらかに何か一言、という色がありありだ。そして、それはあきらかに伯爵に向けられているのだ。

それを察したのか、二人の背中越しに彼の声が聞こえた。

「きっと長旅が祟ったのでしょうか」

二人の目の前には料理を携えた給仕たちが列をなしていた。アンリに気付くと、礼を示そうとする。

「相変わらず、応用の利かぬやつ、母上たちがお待ちだ。すぐに給仕してやれ」

自分たちが目の当りにしているのが、最敬礼しなくてはならない相手だと認識はしているが、そのお方たちが口にするものを床に置くわけにもいかない、だが、その状況では腰を曲げるわけにもいかない、そういう矛盾を簡単に払拭してくれたので恐縮しながらも入れ違いにおたおたと入室した。

とにかく、あの疲れる場所にこれ以上いたくなかった。この件を口実に逃げ出したい気持ちも否定できない。

下男たちに任せることが心配ということに関係なく、彼を伴って自室に向かうことにした。それにしても伯爵はこのような状況を生んだのが自分の責任だと自覚していないようで、上品な笑い声がこちらまで響いてくる。

一方、ギュスターブはまるで操り人形のようにアンリに従う。

「すまないな、冗談がきついお方なのだ」

「あの方はどのような方なのですか？」

馬面の少年が次に付け足すように吐いた言葉は、アンリを驚愕させるのに十分すぎるエネルギーを有していた。

「私には、あの方が殿方になったり、ご令嬢になったり、そんな風にみえるのです」

「なんだと？」

思わず、周囲に誰もいないことを確認して踵を返した。ちょうど、回廊から中庭にある噴水が視界に入った。

「……?!」

「あ、悪い…」

おそらく、アンリは自分でも予想できないくらいに怖い顔をしていたのだろう、思わずのけぞったギュスターブは彼が抱きかかえなければ卒倒して床に頭を打ち付けでもしていたにちがいない。

「ここで休んでいくか…」と噴水の中庭へと連れ出す。彼を噴水の囲いに座らせると、自分もそれに続く。幼いころ、夏の日差しに耐えられずに飛び込んだことがあって、当時の母親の怒りを抑えた声が時間を超えて響いてくるようだった。どんなことがあっても感情を表に出さない人であっただけに、むしろ、恐怖を覚えた。魔法を使って青い血にしか感応しないシグナルを送ってくるのだ。

今頃、伯爵と母親はどんな会話をしているだろうか。そればかりが気になって、空腹や少年のことは視界からあえて遠ざけていた。

「あ、アンリさま……」

彼の行為が少年を恐れさせると、アンリは気付いた。あまりに無神経なことにこれでは伯爵と同じ穴のムジナになってしまうのではないか。思わず頭を搔かざるを得ない。彼にとってはまさに寿命の縮むことの連続にちがいない。

だが、本当に大事なことは、ギュスターブが伯爵の正体を見抜いていたことだ。それほどの青い血の持ち主なのか？思わず目の前の少年を仰ぎたくなかった。彼もそれを察してさらに畏まる。

どうやら、心情のあまり無意識のうちに低姿勢を取っていたらしい。

伯爵と母親がどんな会話を展開しているのか、あるいはギョームの意向などに意識が取られて心はここになかった。

「ここはどんな場所に君の目には見えるかね？」

「まさに天国ですね、貴族様は本当に美しいです。私のようなものがいていい場所のように思えません。本当のことを言うと辛いです」

美しいものかと叫びたくなるのを抑えてアンリは、すっとぼけた顔を演技する。伯爵の意向がわからない。ギュスターブを連れ出すにあたって、主君が見せた態度から自分の行動を黙認しているのは理解できる。いつも肝要なことは言わない。考えろ、ということか。まるで父親のようだ、実父が遺した日記を思い出す。あそこにも、直接的にどうしろ、こうしろとかは書いてない。もちろん、彼が死ぬまでに構築してきた領土防衛に関する人使いなど、すぐに必要なものは具体的に書いてあった。そういうことではなくて、いわば、人生訓のようなものをアンリは期待していたのだ。

あまりにも自分に埋没していて、馬面の少年の声が耳に入っていなかった。

「アンリさま、アンリさま……」

「ああ、すまん……」

思い返してみれば彼の言葉が耳にこびり付いている。しかし、その内容はまったく頭に入っていなかった。

「すまない。もう一度、言ってくれないか？」

不満を漏らすどころか、さらに恐縮してギュスターブは声変わりが終わりきらない擦れた声で

続けた。

「お城ではどんな役目が待っているのですか？」

ふと気づいたことだが、賤民の間で育ったわりにこの少年は態度など基本的なことができて
いる。潜在的な青い血がそうさせるのだろうか、そんなことを思いながら答える。

「伯爵さまにお伺いしなければわからないが、下男のような仕事だろう、たとえば、馬とか」

「馬は大好きです」

それは見ていればわかる。まるであちらの方から吸い付いてくるようだ。よほど、あの動物に
関しては訓練を受けていると見た。

「それよりもだ、そなたは城で働く見返りにどんな報酬を望む？」

「そんな大それたこと、下働きの分際で望むなどと……」

返事は、アンリにもわかっていたことだ。べつにいじわるをしたかったわけではない。単に、
彼自身の逡巡の森にギュスターブも巻き込んでしまっただけのことだ。完璧に参ってしまった。
思い切って彼に正体を提示してしまおうか。いや、それ以前にアンリじしんが彼の身分を知ら
ない。そもそもだ、自分の体内に青い血が流れていることをこの年齢まで気付かない、というこ
とがありうるだろうか？農作業といえども、まったく傷つかないということはあるにない。いや
、それ以前にまったく傷つかずに一人の子供が育つということじたいが非常識ではないか。

「そなた、傷を負ったことはないのか？」

「アンリ様はそんなことまでご存じなのですか？何の奇跡なのか、わたくし目は生まれてから一
度も出血したことがないのです」

「なんだと？」

おそらく、魔法がかけられているにちがいない。それは自分の手に負えるていどの術だろうか
？もしも、彼自身の能力に寄生するかたちで術がかけられている場合、当然のことだが、彼自身
の青い血の程度によっているわけだから、アンリを凌ぐ力量を備えているならば破ることは叶わ
ない。

「ど、どうなさったんですか？アンリさま」

やおら立ち上がると、ギョイエヌ又従子爵は神経を集中させた。その姿があまりにも
恐ろしげに思えたのだろう。おもわず、ギュスターブは後ずさる。

ここならナルボンヌの目から離れられている。思うままではないが、ルイのように青い血を脈
動させることができる。それはナルボンヌの監視が厳しすぎるカルッカソムムの城でさえ不可能
なことだ。ここ、多忙が続いて彼とてもストレスが蓄積されていたのだ。

試すくらい許されるだろう。

はたして、どんなものか……。彼と同程度か、あるいは、城の者たち、ロペスピエール家のアン
ヌに匹敵するような青い血の持ち主か？

少年を見下ろすアンリ。

「怯えなくていい」

そんな言葉が無意味なことは痛いほどわかっている。しかし、確かめずにはおけないのだ。手
のひらを彼の額にかざしてさらに神経を集中させようとしたところ……背後から聞きなれた声が響

いた。

「アンリ、合格だ。はじめて私の言いつけとお父上の遺言を超える拳に出たな」

背後には伯爵が伯爵のままで立っていた。

「殿様……」

「し、声が大きい……彼女と話をしてきたよ……アンリ」

「母上と？……でございますか？」

じっさい、口には出さなかったが、察しがいいなという感じでアンリの横を通り抜けた。そして、ギュスターブ、伯爵が言うにはペリゴールと対面した。少年は、さきほどよりもはるかに怯えだした。さもあらん。

だが、伯爵はそんなことはそっちのけでアデレイドの話題からずらそうとしない。

「あの方は……」

自分よりも身分が低い女性をそのように呼ぶのはよっぽどのことである。

「母上は、殿様の乳母を務めていたのですか？」

「物質的なことはともかく、心理的にあの方はわが母とお呼びしたいお方だ。そなたたちが妬ましいとすら思える」

「御冗談を……そういえば、お二人だけで話をしてきたのですか？」

「そうだ、食事の後でね」

いったい、自分が仕える人はどのような野心を抱いているのか、ぜひとも詳らかにしていただきたい、その気持ちを、しかし、なかなか音声に変換することができなかった。文字の連なりは出来上がっていて喉元まで出かかっているのに、かかわらずだ。

「ペリゴールのことはどうなさるおつもりですか？」

わざと、主君の呼び方を使ってみる。

「どうして、余が合格だといったことに疑問は感じないのか？アンリ」

「はじめてお褒めにあずかりました。それだけで十分でございます、その中身を問うなどと臣下の分を超えます」

家臣が主君に対して慣用句のように使われてきた語の連なりを使ったのか、アンリの皮肉である。それがわからない伯爵ではない。家臣は、一向にうかがい知れぬ主君の真意を、それも無駄であるとわかっていながら、読み解こうとした。すると、素直に言葉が喉からこぼれてきた。

「閣下、あなた様はいったい何をなさりたいと思っておいでなのですか？」